

新年、幕開けの「あけましておめでとう」を申し上げます。

西暦一六〇三年(慶長八年)徳川家康が江戸幕府を開き、一八六七年(慶応三年)徳川慶喜による大政奉還にいたるまでの、約二六〇年間にわたる江戸時代の経済指標を調べてみました。

当時の経済成長率は文献によつて異なり、「ゼロに近い」「二六〇年間を通じた経済成長率は二%程度」「年平均〇・二%」などの資料が見つかりました。

経済の成長といつ概念はあまり無かつた時代のもつです。

また、江戸時代末期の国民一人あたりGDP(国民総生産)は当時の英国が年一七五六ドルに對して、日本は七〇〇ドルほどメキシコよりも低く、世界平均を少し上回つていた程度。

戦国の内戦のち江戸幕府が開かれるまでの歴史、そして明治維新による幕藩政治の終焉(しゅつえん)以後、日本がたどつた諸外国との戦乱や破滅、二次大戦後の劇的な経済膨張の歴史を振り返ると、山本周五郎氏や藤沢周平氏などの時代小説に生き生きと描かれた江戸時代といつものが、極めてユニークな時代に思えてきます。その時代は完全な国内自給自足、資源のリサイクルをも実現させていたもつです。

昨今の社会状況を見ていると未だ濫費、奢侈はあるものの、不要なもの、存在理由の曖昧なもの、虚栄や欺瞞が少しづつ削ぎ落とされ、本来の基本や本質に緩やかに近づいていっているように感じます。経済の停滞がもたらしたトレンドなのかも知れませんが、若い人達の意識にも想像以上にこれらの視点が芽生えつつあるのを感じます。

史上稀有な経済成長と変化のスピードのなかに生きてきたおじさん世代によつては、現実を受け入れつつもちょびり寂しさも感じる世の移りです。

今回は「新春特別寄稿」として鈴木肇氏に『その後の、恩師佐藤はじめ先生』をご寄稿いただきました。

全著作を通じて私のもつとも好きな作品「恩師 佐藤はじめ先生」、「おじさんの青春日記その二」一九九八年・平成一〇年発刊)所収の主人公が五年後にして、拙著への返歌ともいえる珠玉の作品をお送り下さいました。

その後、「佐藤はじめ先生」におかれましては、籠から放たれた鳥のように多方面に翼を広げておられること、何より嬉しく、混迷の世で今後とも筆舌ますます冴えわたらんことをお祈りする次第です。

心より厚くお礼申し上げます。



また本欄を借りて、一昨年の「おじさんの青春日記 その5 新世紀特別号」以来、表紙・イラストの手を煩わせている栗原俊幸氏をご紹介し、氏に深くお礼を申し上げます。

栗原俊幸氏は一九六八年（昭和四三年）生まれの三四歳。

デザイン関係の数々の賞を受賞されている俊才であり、生き生き、ほのぼのとした氏のイラスト作風は一瞬のうちに我々を郷愁の世界へ立ち戻らせてくれます。

広島県呉市近くの海辺で生まれ、幼少の頃からお母様に「口移しで伝授された、過ぎ去った日本の事物や風俗が彼の描画の原点」とのことです。

「おじさんの青春日記」の編集を通じて彼と酒を酌み交わしながら、磨きたれいく庶民の風俗や、時の流れにとり残されていく匠（たくみ）の技や街の情景を語り合つことは、著作を続ける大きな楽しみのひとつでもあります。

今年も多くの方々の協力により、敬愛し、素晴らしい感性をお持ちの方々「おじさんの青春日記 その7」をお送り出来たことに感謝いたします。

「健康をお祈り申し上げます。」

里吉賢司

二〇〇三年（平成一五年）元旦

